



## [ 解 説 ]

(1)	
(2)	
(3)	
(4)	
(5)	

- (1) 「なぜサリーの家族は彼女の祖母の所有物を売らなくてはならなかったのですか」

第1段落第5・6文参照。「不運にも家業が失敗し、多額の負債が残った。ついに、銀行が借金を払うために競売を開くように迫った」とある。「借金を返済するためのお金が必要だった」が、本文の内容と合致する。

「彼女の祖母が自分の所有物を売ってほしいと思っていた」本文にこのような記述はない。

「品物のほとんどは、取っておくのはあまりにも古く汚かった」第1段落第4文に「家族は本当に祖母の物を全部取っておきたいと思っていた」とあることに矛盾する。

「彼らは彼女の祖母と過ごしたつらい時期のことを忘れたと思っていた」これも上述の第1段落第4文の内容と矛盾する。

- (2) 「祖母のキルトについて最もよく表しているものは次のうちのどれですか」

キルトとは、辞書によると「2枚の布地の間に綿・羊毛・羽などを入れて刺し子に縫った掛け布団やベッドカバー」である。第2段落最終文にthe patches of cloth which had been sewn together「縫い合わされた端切れ」とあることから、この物語で出てくるキルトは、一枚布ではなく、小さな布きれを繋ぎ合わせて作られたものだとなる。

さて、第3段落第2文には「彼女の一族の歴史がその縫い目の中に込められていた」とある。具体的には

「曾祖母が赤ん坊の頃に着た服の布きれがあった」(第3段落第3文)、

「別の端切れは祖母のウエディングドレスからとったものだった」(第3段落第4文)、

「サリーの母親の卒業式のときのドレスやウエディングドレスの布切れさえあった」(第3段落第5文)、

「これらの布きれは直接サリーや彼女のいとこたちに関係した物で、赤ん坊の誕生や卒業や結婚など、そのほかの折々の楽しい出来事を記憶にとどめるものだった」(第4段落第2文)

ということである。つまり、「キルトの布きれの1枚1枚が、親族の特別な出来事を思い出させるものだった」というのが適切な説明。「親族が特別な機会を祝うごとに、新しいキルトが作られた」「特別な機会を祝うごとに、親族はキルトの中に何か宝物を入れた」「キルトにはサリーの一族に属する銘が書かれていた」

- (3) 「キルトの競りが行われている間のサリーの気持ちを最もよく表しているのは次のうちのどれですか」 選択肢を順に見よう。

「最初の指値を聞いてすぐ、彼女は100ドルでキルトが買えると確信した」

第6段落第4～6文参照。最初の指値は50ドルで、それを聞いた彼女はショックを受けている。思ったより高い値で始まってしまったからだ。したがって、100ドルで大丈夫とはとても思えなかっただろう。

「競りの始めからだれかが125ドルの値をつけるまで、彼女は自分が最高の値をつけるだろうと確信していた」これも、同様の箇所を根拠として、誤りであると言える。

「彼女はあまりにも神経質になっていて、キルト以外は目に入らなかった」第6段落最終文にShe glanced again at the quilt「彼女は再びキルトに目を向けた」とある。againというのだから、他の物に向けていた視線をキルトに戻したことになる。したがって、キルトだけをじっと見つめていたのではない。

「自分が値をつけた直後は、彼女は指値がうまくいったと思った」第6段落第10～最終文参照。彼女が100ドルの値をつけた後、「しばらく沈黙があった」つまり、だれも新たな値をつけなかった。Hope filled her「希望でいっぱいになった」のである。そして「祖母はこの瞬間自分のことを喜んでくれるだろうと思いながらキルトに目を向けた」と、もうだれも値を上げないと思ってぼっとしているサリーの様子が描かれている。したがって、この選択肢が本文の内容と一致していると言える。

- (4) 「箱を開けたときのサリーの気持ちを最もよく表しているのは次のどれですか」

第8段落第3～5文参照。「箱を開けるとキルトが入っていた。『きっと何か手違いですよ。これはどなたか他の人が手に入れたんです』とある。つまり、「彼女はそれが自分宛てのものではないと思った」が適切。

「彼女は自分の予測が実現したと思った」

「彼女はだれかが何かをたくらんでいると思った」

「彼女は手に入れた人がそれを気に入らないのだと思った」

- (5) 「箱の中にあった手書きのメモは、サリーに何をしてくださいと言っていましたか」

メモの最終文にはI only ask that you do a similar favor in the future for a stranger who happens to cross your path.とある。do O favorは「Oに親切にする」の意。「私はただ、将来あなたと出会う見知らぬ人に、同じような親切をしてくださいとお願いするだけです」というのが文意。したがって、「それは他の人に対して親切なことをしてくださいと彼女に頼んでいた」が適切。

「それは競売で見知らぬ人にいくらかお金をあげてくださいと彼女に頼んでいた」サリーはお金をもらったわけではないので「同じような親切」という点で不可。

「それは見知らぬ人のお金でキルトの代金を払ってくださいと彼女に頼んでいた」

「もう一度オークションにキルトを出品してくださいと彼女に頼んでいた」



## [ 全文訳 ]

サリーは早い時間にやってきた。古い家を歩き回りながら、彼女はこれからまさに起ころうとしていることのせいで悲しくならずにはいられなかった。敬愛する祖母がこの家で92歳でなくなってから1年近く経っていた。親族一同は祖母の物をすべて取っておきたいと本当に望んでいた。残念なことに家業が失敗し、多額の負債が残った。ついに、銀行は、負債の返済をするために一族に競売をするように迫った。競売は今日開かれることになっていた。

サリーは、祖母の物である、お皿や古い家具などがすべてきちんと並べられている庭をぶらぶら歩いていった。彼女は中でも100年以上もの間家にあったキルトを見たいと切に思った。それは庭の隅にあった。いつも思い浮かべていたのと同じ状態で、祖母のベッドの上に広げてあった。そばに寄ると、愛情を込めて丹念に縫い合わされた継ぎ布をそっとさわり始めた。

もしこのキルトが口をきくことができれば、きっとさまざまな話をするところだろうとサリーは思った。一族の歴史が全部この縫い目の中に込められていた。たとえば、曾祖母が赤ん坊の頃の服の布切れがあった。別の端切れは祖母のウエディングドレスの布地からできたものだった。サリーの母親の卒業式のときのドレスやウエディングドレスの布切れさえあった。

一族のこの宝物の周辺にはもちろん、もっと後で加えられた物もあった。それらの布切れはサリーや彼女のいとこに直接関係するものであり、赤ん坊の誕生、卒業、結婚その他の幸せな出来事を記憶にとどめるものであった。サリーは、祖母がこうした布の切れ端を何でも取っておいてくれたことがとても嬉しかった。

サリーは今まで競売に参加したことはなかった。ほしい品物に値をつけなくてはならないということは聞いていた。つまり、人々がある品物にお金を出し、最も多くのお金を申し出た人がその品物を手に入れるというのだ。この数週間、彼女はキルトに競り値をつけるためになんとか100ドルを貯めた。きっとこれで十分だと彼女は思っていた。とうとうその大きな瞬間がやってきた。あたりを見回し、どれだけ多くの人がやってきているかを見て彼女は驚いた。中にはわざわざ遠くから来た人もいた。

競売が始まり、サリーはじっと待った。ついにあのキルトが競りにかけられるときがやってきた。彼女は財布を握りしめ、耳を傾けていた。最初の値は50ドルだった。彼女はショックを受けた。高すぎる！すぐに他の人たちが値をつけ、すぐに競り値は85ドルに達した。今言わなければ、もうチャンスはない。深呼吸をすると、彼女は大声で「100ドル！」と言った。一瞬、しんとした。希望が彼女の心を満たした。彼女は再びキルトに視線を向けて、この瞬間もし祖母がいたら、どれほど彼女のことを喜んでくれただろうと思った。

まさにそのとき、背後から他の人が叫んだ。「125ドル！」一瞬にしてサリーの目は涙でいっぱいになった。それでおしまいだった。チャンスは失われてしまったのだ。突然ひどくみじめな気持ちになって、彼女はどのようにしてこんなにたくさんの方があんな古いすり切れて薄汚れたキルトなんかに興味をもつのかしらと思わざるをえなかった。キルトは最終的に500ドルで、まったく見知らぬ人に売られた。その後は、サリーは空っぽの気持ちで、子供の頃の思い出の品が競り落とされるのを見ているだけであった。

競売の後、彼女は自分のものになったいくつかの品の支払いをするためカウンターへ行った。レジの女性が彼女にかなり大きな箱を手渡した。開けてみるとあのキルトが入っていた。「きっと何か手違いです。どなたか別の方がこれを競り落としたんですから」と彼女は言った。そのとき、彼女は手書きのメモが安全ピンでキルトに留められているのに気づいた。メモにはこう書いてあった。

奥様

競売が始まる前、私はあなたがこのキルトを眺めているのに気づいておりました。きっとこの品物はあなたにとってたいへん大切なものだったのでしょう。競りに負けたときのあなたの悲しみははっきり見てとれるほどだったので、私も心が痛みました。あなたは私をご存じありませんが、どうぞ私からの贈り物としてこのキルトをお受け取りください。あなたから代金を払っていただくなどとは考えておりません。ただ、将来あなたと偶然出会う見ず知らずの人に同じようなことをしてあげてくださいとお願いするのみです。

敬具

情にもろい他人より